魔法少女リリカルなのはStrikerS 一途な思い

czhs

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　一途な思い

【Ｎコード】

Ｎ０２５１Ｚ

【作者名】

ｃｚｈｓ

【あらすじ】

八神はやてが率いる新部隊その名を機動六課。この出来て二日目の部隊に異動してくる一人の魔導士がいた。これは機動六課と一人の魔導士が織り成す物語。

始まり（前書き）

初めまして『ｃｚｈｓ』と申します。ド素人なので温かい目で見て頂けたら幸いです。

始まり

はやてｓｉｄｅ

はやてとリインはある書類を見ていた。
「まさかあの人が来てくれるとは思ってなかったわ～リンディさんに頼み込んだかいがあったちゅうもんや！」
「誰なんですかその人って？」
「うちやなのはちゃんそれにフェイトちゃんが前からお世話になっとる人や。ここ最近おうてへんから会うのが楽しみやわ～♪」

二人が話してしるとドアをノックし二人の人物が部屋に入ってきた。
「はやてちゃん急に呼び出しなんて何かあったの？」
はやてに話しかける人物、栗色の髪をサイドポニーにして教導管の制服に身を包む管理局のエースオブエース、高町なのはだ。

「実はな今日他のところから異動してくる人がおるんよ。二人も知っとる人やから教えとこうと思ってな」
「私達も知ってる人？」

はやての言葉に首を傾げる金髪の女性。黒い執務管の制服に身を包んだフェイト・Ｔ・ハラウオンだ。
「せや、これがその人に関する書類や」

二人は書類を見ると同時に驚きと嬉しさのあまり声をあげた。

「えええぇぇ！！！優君が来るの！？」
「優が一緒ってことは…四人揃うのは三年ぶりだね♪」

「そうなんよ、はぁ～はやく来てくれへんかな～」

優ｓｉｄｅ

「ここが機動六課か…金使い過ぎだろ」

『まぁ新築ですらね。それよりマスターあまり時間がありませんよ』

「そうだなありがとなアイリス」

『どういたしまして』

俺こと如月優と相棒のアイリスは六課の校舎前にいた。三日前にリンディさんにいきなり異動させられたのだ。それも拒否権なしにな

「アイツらと再び会うことになるなんてな…これもリンディさんの策略かなんかなのか？」

『策略かどうかはわかりませんが少なくともあの人に限って悪意があってやった事ではないと思います』

「そうだな……さてと行くか」

ｎｅｘｔ

出向（前書き）

二話目です。やっぱ小説書くのって難しいですね……

出向

優ｓｉｄｅ

「中に入ったはいいが部隊長室ってどこだ？」

『私に聞かれましても…』

「だよな～」

こんな感じで俺達は六課の校舎内をさ迷っていた。受付の人が居なかったからまぁしかたがないと思い自力で探していたんたが、一向に見つからない

「それに誰にも会わないとは…」

溜め息をついていると前から青髪とオレンジ髪の子達が歩いてきた。ちょうどいいから聞いてみるか

「ちょっといいかい？」

「はい、何でしょうか？」

青髪の方が聞てくる

「部隊長室がどこにあるか教えてくれないか？」

「失礼ですが、どちら様ですか？」

今度はオレンジ髪の方が聞いてくる

「おっと名乗ってなかったな。俺は如月優一等空尉、本日から機動六課に異動して来た者だ」

「！？失礼いたしました。ティアナ＝ランスター二等陸士です」
「スバル＝ナカジマ二等陸士です」
「よろしくなティアナ、スバル」
「はい、では案内させて頂きます」

三人は部隊長室に向かった

はやてｓｉｄｅ

「優君と直接会うのは二年ぶりやな～今度どっかに連れてってもらおうかな♪」
「だめだよはやてちゃん、連れてってもらうのは私なんだから！」
「二人共、何言ってるの？優は私と出かけるんだよ！」
そんな事を言っているとティアナから通信がはいった。

〈失礼します、如月一等空尉をお連れしました〉

「わかった、ありがとな」

〈いえ、それでは〉

通信が切れるとドアをノックして優君が入ってきた

「失礼します、本日より機動六課に出向します如月優一等空尉です。一年間よろしくお願いします」
「機動六課部隊長の八神はやてです。六課はあなたを歓迎します。」
お互い敬礼し握手をする
「さて、堅苦しいのはしまいや。久しぶりやね優君♪」

「これからよろしくね優君♪」
「よろしく優♪」
「久しぶりだなはやて、なのは、フェイト！」
next

思い（前書き）

三話目です。そういえば主人公の容姿について書いてなかったような……

思い

優達は軽く挨拶をした後、今後の事について話し合っていた。
「俺は何をすればいいんだ？」
「優君にはなのはちゃんとフェイトちゃんの補佐役かつ六課の副部隊長をしてもらうつもりや」
「つまり三人の付き人ってことなるのか？」
「まぁそんな感じや！」

話を聞き終えると優は少し俯き考えこんでいた。
地上本部からの呼び出しもあるからな…どうしよう……
その姿を見てなのはは恐る恐る尋ねた

「優君、私達と一緒じゃいや？」
聞いてくるなのはの方を見ると少し目を潤ませ上目遣いでいた。よく見ればフェイトとはやても同じようにしている

「いやな訳ないだろ！ただ地上本部からも呼び出しがあるから四六時中一緒にはいられないぞ」

それを聞くと三人の顔がいっきに明るくなった。
「もちろんそのつもりや。仕事内容は個別に聞いてな「了解」じゃあ六課全員をホールに集めとるから挨拶しに行こか！」

「その前一つだけ言わせてくれ。三人とも…無理はするなよ」
「優（君）……」
「まぁそれだけだ。はやくしないと置いてくぞ？」

「あ、うんって待ってよ優君～」

四人は部隊長室をあとにする

（マスター…あの事言わなくて良かったんですか？）

（無駄な心配をかけたくないからな…それにできるならこの事は知られないほうがいい。俺にとってもあいつらにとってもな）

俺がやる事は一つ、あいつらを守る…ただそれだけだ……

ｎｅｘｔ

模擬戦　前（前書き）

四話目です。

とりあえずあと一話かいたら主人公設定を書きたいと思います。

模擬戦　前

俺は今柱の後ろに隠れている。何故かというとはやてに隠れてろと言われたからだ。本人曰く皆を驚かせたいらしい

「皆忙しい中集まってくれてありがとな。集まってもらったんは今日から六課に出向する人を紹介するためや。それじゃ優君おねがい♪」

言われて出てみるとロングアーチ陣が「えええぇぇ！？」と言いたそうな表情をしている。スバルとティアナは一度会っているからかそれほど驚いていない

「わざわざ集まって頂きありがとうございます。今日から機動六課に出向となりました、如月優一等空尉です。立場は副部隊長となりますが気軽に接して下さい。一年間よろしくお願いします」

「あの如月さんってもしかしてあの有名な『銀髪の断罪者』さんなんですか？」

リインが質問した瞬間、優の放つ空気が変わった。殺気を放つようにして…

「そう呼ばれることもあるができるだけその名で呼ばないでくれ……」

静まりかえる部屋内。その沈黙を破ったのは部隊長であるはやてだった

「ま、まぁとりあえず自己紹介はこれぐらいにして、各自仕事に戻ろか！」

優ｓｉｄｅ

はぁ～やっちまったな～無意識だったとはいえ初見であれはやばいよな～これからどうしよう……

そんな事を考えているとなのはとフェイトが話しかけてきた。多分さっきの事についてだろう。

「優君さっきはどうしたの？いつもの優君らしくなかったよ？」

「悪い、無意識のうちにあんな事になってた。ほんとにらしくないよな…」

「抱え込んじゃだめだよ？何か悩み事があるならいつでも相談にのるから！」

「あぁ、ありがとな二人とも。だけど大丈夫だよ」

「「うぅ／／」」

そう言って二人の頭を撫でる。二人共、顔を少し紅く染め恥ずかしそうに俯く。ちなみに頭を撫でるのは昔からの癖だ。

「さてとそろそろフォワード陣の訓練の時間だ、はやく行かないとな！」

「「うん！」」

そうやって三人は訓練所に向かった。優にこの後降りかかる不幸のことなんて知るはずもなく…

next

模擬戦　後（前書き）

五話目です。戦闘シーン…難しいです。

模擬戦　後

優ｓｉｄｅ

今、俺達の前にはフォワード陣がきれいに整列している。ちなみにフェイトは執務官の仕事が急に入ったらしく途中で別れた

「じゃあ、早速訓練始めようかって言いたいところなんだけど今日は模擬戦の観戦をします。ということで優君お願いね♪」

はい！？そんなこと聞いてないぞ！つーかなんでフォワード陣はいかにも「楽しみにしてます」的な視線で俺を見てんだ！

（マスターやるしかないですよ。それにあれを使わない程度なら問題ないと思いますが）

（…そうだな……まったく先に言ってくれよ…）

「はぁ…で、相手は誰なんだ？」

「私だ！」

出てきたのはバトルマｎ…もといシグナムだった。目を輝かせながら、その右手にはレヴァンティンが握らていた。

「ったく相変わらずだな、シグナム…その癖はどうにかならないのか？」

「その癖とはなんだ？それよりも早くはじめるぞ！」

そんな訳で俺とシグナムは空中にいる。もちろんバリアジャケット

を着ている。

『ルールは戦闘不能か降参させた方の勝ちだよ。二人共、準備はいい？』

「「おう（大丈夫だ）」」

『じゃあ始めるね、レディーゴー！！』

合図がかかかると同時にシグナムが斬りかかって来た。それを魔力で作られた双剣で受け止め、激しい打ち合いをはじめた。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ティアナｓｉｄｅ

いま私の上空では二人が打ち合っている。シグナム副隊長も強いけど如月さんも強い。しかしあの人はデバイスを持たずにどうやって戦っているんだろう

「なのはさん、如月さんはデバイスを使わないんですか？それ以前のあの人はどうやって戦っているんですか？」

「優君は昔から魔力の使い方が上手でね、あれは自分の魔力を双剣の形にしているんだよ。だから基本的にはデバイスは使わないんだ」

「そうなんですか…」

（やっぱり凡人は私だけか…）

ｓｉｄｅｏｕｔ

空中では両者共に一歩も譲らない戦いが繰り広げられていた。斬り、防ぎ、回避し、また斬る。何度もこの動作が繰り返されていた。

これじゃきりがないな…

一発かましてやるか！

優は一旦距離をとり双剣をブーメランのように投げつけた。その左右から襲ってくる双剣を落としたシグナム、しかし彼女の視界に優は居なかった

「おらぁぁぁ！！」

「くっ！」

そんなシグナムの上には魔力でできた巨大な剣を振り下ろしながら突っ込んできた優がいた。とっさにレヴァンティンで防ぐシグナムだが勢いを殺しきれず地面にたたきつけられてしまう。だがすぐに体勢を立て直すシグナムに地面に降りた優は少し驚きの表情を見せた

「まさか今のを防がれるとはな…だが次で決めさせてもらう」

「甘く見てもらっては困るな。いいだろう、受けてたとう！」優は左手に魔力でできた日本刀を持ち居合いの体勢をとる。シグナムもカートリッジをロードしレヴァンティンを構える

「紫電……」

「無限……」

ーーーーーーーーーーーー

「一線！！！」

「乱線！！！」

両者が斬り合い沈黙が訪れた。いまだに双方共動かない。なのは達はどうなった分からずただ待っていた。そんな中…

「流石だな…如月…」

そう言ってシグナムは倒れる。優は慌てて近寄るがシグナムの意識

がはっきりしている事を知り胸を撫で下ろす

『シグナムさん戦闘不能、よって勝者優君！』

ｎｅｘｔ

オリ主設定（前書き）

オリ主紹介です。短いのでできればもう一話投稿します

オリ主設定

名前：如月（きさらぎ）　優（ゆう）
歳：二十歳（なのは達と同級生）
身長：１８０？
体重：７５？
髪：銀髪の短髪
階級：一等空尉
魔力：Ａ＋
魔力光：淡緑色
レアスキル：なし
バリアジャケット：白色のズボンに黒のＴシャツ、黒のコートを羽織る。

なのは達とは小学校六年生の時に転入生として出会った。過去の話は後ほど…

無限乱線（むげんらせん）
・魔力でできた日本刀を居合いの姿勢で構え、振り抜くと同時に魔力を一気に放つことで無数の斬撃をくり出す。
・魔力を多くすることで斬撃の数が増える。

デバイス：アイリス
インテリデバイス
待機状態：ブレスレット
戦闘時：変化なし（のちのちは…）
機能：おもに魔力の制御・演算

疑問（前書き）

六話目です。今回は少しシリアスが混じってます。感想お待ちしてますm（＿＿）m

疑問

優ｓｉｄｅ

模擬戦を終えた俺はシグナムに肩をかしてなのはとフォワード陣がいるところに戻った。何か知らないがなのはは少し不機嫌そうな顔をしている

「すまなかったな、如月。もう大丈夫だ」

シグナムは俺から離れて行く。それと同時にスバルが駆け寄って来た

「如月さん凄いです！あのシグナム副隊長に勝っちゃうなんて！」

「まぁこれでも一等空尉だからな。あぁそれと如月さんじゃなくて優さんとでも呼んでくれ。あんまり慣れてないんでな…ティアナとエリオとキャロも頼むよ」

「「「「「はい！」」」」」

ったく相変わらず元気だな、こいつらは。これも若さ故だな…

（何言ってるんですか、マスターだって充分若いですよ）

（アイリス！？心読むなっての…つーかこの絡みも何回目だよ…）

（長い付き合いですからね）

そんなやり取りをしているとスバルに変わりティアナが話しかけてきた

「優さん質問していいですか？」

「なんだティアナ？」
「優さんはどうしてそこまで強くなれたんですか？」
こいつはどうしてそんな事を聞いてくるんだよ。まったく…
「どうして強くなれた、か……人は想い一つで変わることができる。俺から言えることはそれだけだ…」
「想い…ですか……」
ティアナは俺の言葉を聞くと何か考えるように俯いた。
求めていた答えじゃなかったみたいだな……だが俺にとってはこれが答え、これが俺の存在意義なんだよ
「さてと、模擬戦も終わったし俺はデスクワークでもしますかな。いいかなのは？」
「あ、うん。大丈夫だよ！じゃあまた後でね！」
「「「「お疲れ様でした」」」」
「おう！」
ｓｉｄｅｏｕｔ
なのはｓｉｄｅ
「皆、さっき模擬戦を見てどんな事を思った？それをレポートにまとめて提出してね♪」
「「「「はい！」」」」
「それじゃ今日の訓練はここまで！」
「「「「ありがとうございました！」」」」

フォワード陣はさっきの模擬戦について色々と話しながら自室に戻っていた

ティアナの質問に答えてた時の優君の顔、なんかとても悲しそうだった…私が知る限り心当たりはない…この四年の間に何かあったのかな…後でフェイトちゃんとはやてちゃんに聞かなくちゃ！

ｓｉｄｅｏｕｔ

はやてｓｉｄｅ

うちは今、

リンディさんと通信と通信しとる。なんでもリンディさんが話したいことがあるんやて

「それにしても急にどないしたんですか、リンディさん？」

『ごめんなさいね、別に急に話すことじゃなかったんだけどね…話って言うのは優君のことについてなの…』

「優君のついてですか？」

『うん、彼とあなた達は四年間会ってなかったはずよね？』

「はい、時々連絡を取るぐらいでした」

『そう…じゃあそれを前提にお願いするわ、優君についての四年間は詮索しないで頂戴』

「！？どういう事ですか？この四年間で優君に何かあったんですか？」

なんやて！？今の言い方やと明らか何かあったって事や！そんなん見逃せる訳あらへん！

『お願い、これは私が言っていい事じゃないの。彼があなた達言い

出すまでは待って欲しいの…』
「分かりました。ただ優君に何かがあったかどうかだけ答えて下さい」
『……何かがあったことは確かよ…それじゃこの話は終わりね』
「失礼します」

うちらにも言えん事ってことなんか…優君、この四年間で何があったんや……

next

暗躍（前書き）

七話目です

これから少しずつ優が動き出します。ちなみに今回も若干シリアスです。

感想お待ちしてますm（＿＿）m

暗躍

優ｓｉｄｅ

シグナムとの模擬戦を終えた後、パソコンに向かいデスクワークをしていると通信が来た。発信者は…

「何か用ですか、リンディさん？というよりあの事以外は考えられませんが…」

リンディ・ハラオウン統括官だった。この人は俺にとって恩人のような人だ。色々と世話になった。色々と……

『えぇその事もあるんだけど……ごめんなさい…はやてさんに優くんの事、話してしまったわ……』

「！？詳細についても？」

『いいえ、ただこの四年間の事を詮索しないでって言っただけ……』

まったくこの人は何をしているんだ…そんな言い方したら、いかにも何かありましたって言ってるようなもんじゃないか…

「はぁ～まぁいいですよ。あなたが言ったなら、あいつらも詮索はしないでしょう。それよりも仕事の内容を教えて下さい」

『分かりました、今回の仕事はある犯罪組織を壊滅させることです。その組織はこれまでいくつかの次元世界で臓器売買、快楽目的に幾度となく殺人を繰り返してきました。昨日、居場所が判明し相手が相手だからあなたに任されたという訳。居場所は後で送るから……』

「了解しました。改めて許可を…」

『…はい、許可します……ごめんなさい、本当はこんなことさせた

くないんだけど…』

「あなたが気に病む必要はありません、それでは失礼します」

リンディさんとの通信が切れる。それにしてもあの人はいつまでたってもお人好しだな。そんな人がよく統括官になれたもんだ。まぁ俺もそんな彼女に救われたのだから何も言えないが……さてとデスクワークも終わったし、仕事にいきますか

（マスター、組織の居場所のデータが送られてきました。転移魔法で十分程で着きます）

（そうか…今回も頼むぞ、アイリス）

（はい…マスター、くれぐれも無理をしないで下さい…）

（あぁ分かっている）

これで何回目になるか分からないが俺達はまた出向くのだ。辺り一面に鉄の香りが漂い、赤く紅く染まる場所になるだろう場所へと…

ｓｉｄｅｏｕｔ

はやてｓｉｄｅ

リンディさんの話を聞いて、うちはなのはちゃんとフェイトちゃんを部隊長室に呼んで優君の事について聞くことにした。それが正しいことか分からへんけど……

「ごめんな、二人共。仕事があったやろうに…」

「大丈夫だよはやてちゃん。フォワード陣の訓練も終わったし」

「私も大丈夫だよ、はやて」

二人は微笑みながら言ってくれる。うん、やっぱ持つべきものは友

達やな！…おっとそんな場合やなかったわ

「そんなに重要な事やないんけどな。二人は優君がこの四年間、何しよったか知っとる？」

「う～ん、時々連絡はしてたけど何してたかは知らないな～」

「私はとにかく仕事が忙しいとしか聞いてないよ。どうしてそんなこと聞くの？」

二人にはまだ伏せとくべきかな…リンディさんにも釘打たれた訳やし…

「いや、ただ気になっただけや。やっぱ気になるやん？」

「まぁそうだけど…なのはどうしたの？浮かない顔して」

うちの質問に答えた後、顔を曇らせたなのはちゃんにフェイトちゃんが聞く

「…実はね、模擬戦の後ティアナが優君に聞いてたんだ。どうやったら強くなれるかって。その時の優君、なんか悲しそうだったの…だから何かあったんじゃないかって…」

「「……」」

なのはちゃんの言葉に静まりかえる部隊長室。そんな部隊長室に話題の人、優君が入って来た…あかん、なんか気まずいわ……

「失礼します」

「どうしたん優君？」

「地上本部から仕事が入ってな、三日程空けることになるから報告に来たんだ」

「…分かった、気をつけてな」

「あぁ」
「待って！」
それだけ言って出て行こうとする優君になのはちゃんが声をかけた
「優君、帰ってきたら少しだけ話さない？聞きたいことがあるんだ…」
「…帰ってきたらな…」
部隊長室を出て行く優君、うちらはその背中をただ見つめていた。
その目に不安を写しながら……
next

ファーストアラート（前書き）

八話目です

題名はアラートになっていますが、フォワード陣の活躍は書いてませんm（＿＿）m

ファーストアラート

ティアナｓｉｄｅ

訓練（模擬戦の観戦）を終えた私達はデバイスマスターのシャーリーさんのところに来ていた。私達の新しいデバイスを受け取るためにだ

「これが新しいデバイス…エリオのストラーダ以外はかなり変化してるわね」

「そうだね。ティアのクロスミラージュは二丁拳銃になってるし、私のマッハキャリバーもなんか凄そうだし！」

そんな事を言いながらスバルは目を輝かせていた。何浮かれてるのよ、まったく…ちびっこ二人だって落ち着いているっていうのに…

「皆のデバイスにはリミッターが付いているから、なのはさんから許可をもらったら私のところに来てね。リミッター外すから！」

「「「「はい！」」」」

それぞれが自分のデバイスを見ていると、突然警報が鳴った

「！？きっとアラートだわ。皆行くわよ！」

「「「うん（はい）」」」

やっときた初任務、気を引き締めなきゃ！ランスターの弾丸に貫け

ない物はないって証明するために…

ｓｉｄｅｏｕｔ

優ｓｉｄｅ

俺がいるのはある廃墟。取り壊しが決まって半年経つがいまだに取り壊されていない。奴らにとって最高の隠れ家というわけだ

（ここが、組織の居場所か…アイリス、中に何人居る？）

（七人です。その中に魔導士が二人、質量兵器を持つのが四人います）

（そうか…人数が少なくて助かるぜ…さて正面から行きますか！）

入口である扉を蹴破る。こっちに気づいた犯人達はそれぞれ武器を構えるガンをくれていた

「なんだてめぇ？ここはお前みたいなガキが来るところじゃないんだよ！」

「うぜえな…管理局の者だ。おとなしく投降すれば弁解の予知はごくわずかだがあるぞ。おとなしく投降した方が身のためだ」

「誰が投降なんてするかよ！そうだ、いい事思いついたぜ。てめぇをぶっ殺した後、てめぇの生首を管理局に送りつけてやるよ。安心しな、臓器はちゃんと売りさばいてやるからよ！」

犯人達はリーダー格の男の言葉に同意し狂ったように笑っている。

この屑共が……

「一応警告してやったからな、これからは俺のやり方でやらせてもらう。死んでも文句言うなよ？」
「「上等じゃボケ！」」
犯人達は魔力弾や拳銃で攻撃してきているが一発も攻撃は通らない。なぜなら俺が魔力で作った盾によって全て防いでいるからだ。そんな犯人達は性懲りもなく打ち続けているが結果は変わらない…
「くそ、なんで当たんねぇんだ！？もっとだ、もっと撃ちまくれ！」
「そんなの当たるかよ。ファングイーター、セット」
両手から粒子状の魔力を放ち、犯人達を取り囲む。犯人達は攻撃に意識が向いていて気づいていない
「これが最後の警告だ、投降した方がいいぞ」
「うるせえ！死にさらせ！！」
犯人達は耳も貸さず、なおも攻撃を続ける…まったく馬鹿な奴らだ…投降すれば死ななくてすんだものを…まぁどっちにしても死ぬのが早くなるか遅くなるかの問題だから、あまり意味はないが……
「……ファイア……」
放たれた魔力は杭のような形を形成し一斉に犯人達を貫ぬいていく
「ぎゃあぁぁぁぁ！！！」
「や、、やめてくれぇぇぇぇ！！！」
犯人達の悲鳴が止むとそこは辺り一面、血溜りとなっていた。だいたいが死んでいるが生き残っている者がいた。リーダー格の男だ

「た、助けて…くれ…な、なんでも…するから…」
「残念ながらお前達はすでに生存権を失っている…だからここで死ね…」

魔力で剣を形成し男の首に当てると男は遂に喚きだした

「か、管理局の人間が…こんなこと…」
「悪いな…俺は裏の人間だから、殺しをしても問題にはならないんだよ。じゃあな、罪人…」
「ま、待ってK……」

男が言葉を発することは二度となかった…

（…仕事は終わったな…）
（お疲れ様でしたマスター）
（あぁお前もな…六課の連中はどうしてる？）
（今はレリックを回収しに任務に出ています）
（そうか…あいつらなら問題ないだろうが、一応行っておくか…）

「ムーブ…発動！」

ーーーーーーーーーーーーーー

ところ変わって場所はリニア。俺が着く頃にはフォワード陣は無事にレリックを回収し後は引き継ぎをするだけとなっていた

（来る必要はなかったみたいだな…）
（そのようですｎ…！？マスター、ガジェット反応がフェイトさんの近くに！本人は気づいていません！）

（何！？すぐに向かうぞ！）

ｓｉｄｅｏｕｔ

フェイトｓｉｄｅ

レリックも回収したし後は六課に帰るだけ、そう思ってた矢先だった

『フェイトちゃん、後ろ！』

なのはから突然の通信に反応し後ろを見ると攻撃をしようと突っ込んでくるガジェットがいた。間に合わない、そう思い目を瞑った…が来るはずの衝撃はいつまでたっても来ない。目を開けるとそこには私の肩を左手で抱き、右手で防御している優がいた。攻撃を防ぐと同時に淡緑色のスフィアがガジェットを撃ち落とす

「大丈夫か、フェイト？」

「う、うん／／／／ありがとう、優／／／／ところでどうし優はここに？」

「仕事が終わったからな、アイリスから状況を聞いて顔を出したって訳だ。さてとガジェットの反応もないしレリックも回収したようだし帰るぞ」

「うん、そうだね！」

next

sideout

ファーストアラート（後書き）

技説明

ファングイーター
・辺りに放った魔力を杭のような形にして飛ばす。
・形のイメージはフェイトのプラズマランサー。
・数を少なくすれば複雑な動きで放つことができる

ムーブ
・転移魔法
・時間をかければかなりの距離を転移できる

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0251z/

魔法少女リリカルなのはStrikerS 一途な思い

2011年12月17日23時51分発行